

『捷解新語』の語彙改訂の方向性 ——語種改訂を中心に——

朴 真 完

1. 先行研究と問題提起

『捷解新語』は朝鮮時代司訳院で編纂された日本語会話教科書である。『捷解新語』は、同時代の他の日本・朝鮮国内資料と区別される重要な特徴を持つ。それは、その原刊本(1676年)が一次改修本(1748年刊行、以下、改修本)と二次改修本(1760年代頃刊行、現在未発見)を経て、重刊本(1781年刊行)まで、同じ内容が三回にわたって改訂されたことである。したがって、百余年にわたっての両国語の変化様相を調べるのが可能で、日本語の中・近世における言語変化を反映する資料として注目されてきた。また『捷解新語』は、原文(中世・近世日本語)と対訳文(近代韓国語)の形式を取っているため、日本語と朝鮮語の歴史的な考察において、両国語を互いに対照することによって客観的な研究が可能である。

これまで『捷解新語』の語彙についての研究は大きく三つの方向から進められてきた。まず個別語彙の変化に重点をおいた研究⁽¹⁾、『捷解新語』の語彙と他資料の語彙を比較検討した研究⁽²⁾、そして『捷解新語』の語彙を計量的に考察した研究⁽³⁾である。

本稿で取り扱う語種⁽⁴⁾改訂についても先行研究で既に論じられたことがあるが、主に日本語文の分析に留まっており、その対訳文である朝鮮語文の語種改訂との関係については十分検討されていない。したがって、ここでは『捷解新語』三本(原刊本、改修本、重刊本の総称)を対象とし、原文と対訳文の語種改訂の例を提示して分析することを主な目的とする。またその分析の結果を基に、『捷解新語』語種改訂の様相と方向性、そして語種改訂の目的について述べる。

2. 語種改訂の様相

2.1 漢語化

本章では、『捷解新語』語種改訂の様相を調べる。本稿での調査方法は次のとおりである。

まず『捷解新語』の語彙を、漢語⁶⁾と固有語(和語とハングル)に大別し、各刊本におけるその使用状況を調べる。調査対象語は、体言、用言、修飾語等の実質的な成分に限り、三本を通じて語種の変化が見られる例だけを対象とする。また語種改訂の把握を容易にするため、日本語文での仮名で書かれている漢語を漢字で示し、また朝鮮語文でハングル表記された漢語も漢字で表す。漢字表記については、京都大学文学部国語学国文学研究室(1973)と安田章・鄭光(1991)に拠った。

次に、表の作成方法について簡単に述べると、まず原文での語種改訂の例を巻数、丁数順に示す。表題語は、漢語化の場合は改訂後の漢語を挙げ、固有語化の場合は改訂前の漢語を挙げておく。また各々原文の単語に該当する対訳文も並記する。この時、ハングル表記された漢語は、括弧の中にその元の漢字を表す。そして重刊本段階で該当語、該当部分が削除された場合には空白のまま残しておく。最後に原文の語種変化に伴う対訳文の語種変化には、他の例と区別するために網かけを施しておいた。

このような方針に従って、改訂による語種変化の例を調査していく。原文での漢語化の例を示せば次のとおりである。

<表1> 和語が漢語に改訂された例(改修本段階)

番号	刊本 表題語	原刊本		改修本		重刊本	
		原文	対訳文	原文	対訳文	原文	対訳文
1	平座す	ろくにいとら しられ	편(便)히 안습소<1.2b>	御へいさなさ れませい	편히 안습소<1.3b>	御へいさなさ れませい	편히 안습소<1.3b>
2	安心す	きおのはしま るした	웃을 편- <1.4b>	あんしんいた しました	安心き- <1.6b>	あんしんいた しました	安心き- <1.6a>
3	今日	けう	오늘<1.13a>	こんにち	今日<1.18a>	こんにち	今日<1.16b>
4	大船	おうふね	큰 뱃<1.13b>	たいせん	大船<1.19a>	たいせん	大船<1.17b>
5	水夫	ふなこ	격군(格君) <1.13b>	すいふ	水夫<1.19a>	すいふ	水夫<1.17b>
6	方方	かたかた	方方<1.14b>	ほうほう	方方<1.20b>	ほうほう	方方<1.18b>
7	姓名	うちな	姓名<1.16b>	せいめい	姓名<1.24b>	せいめい	姓名<1.22a>
8	在前	いま	앞가<1.23b>	さいせん	알가<1.35b>	さいせん	알가<1.28b>
			문제<8.8a>		在前<8.11b>		在前<8.9a>

9	病氣	きあいけ	편(便)이	御ひやうき	病<1.39b>	御ひやうき	病<2.1b>
			아나<1.26b>				
			병(病)<1.27b>		病<1.43a>		
10		きあい	병<1.29a>	御ひやうき	病<1.43b>		
			병<1.29b>		病<1.44b>		
11	食事	くいもの	머글 췌 <1.27b>	しよくし	食事<1.41a>		
12	病身	やまいけな	병(病)든 <1.27b>	ひやうしんな	病身든 <1.41a>	ひやうしんな	病身든 <2.2b>
13	着	くる	오-<1.27b>	ちやく	오-<1.41b>	ちやく	오-<2.3a>
14		御ありつき	又붙-<5.20a>	御ちやく	오-<5.29a>	御ちやく	오-<5.20b>
15	作病	かとやまい	양병(伴病) <1.30b>	さくひやう	양病<1.46b>	さくひやう	양병<2.5a>
16	不快	きあいけ	병들-<2.2a>	御ふくわい	병들-<2.2b>	御ふくわい	병들-<2.8b>
17	珍重	めてたう	아름다와하- <2.3a>	ちんちやうに	길보외<2.4a>	ちんちやうに	길보외<2.10a>
18		めてたう	아름답- <8.14a>	ちんちうに	길비 <8.21a>	ちんちうに	길비 <8.15a>
19	食物	くいもの	머글 것<2.8a>	しよくもつつ	먹글 것 <2.11b>	しよくもつつ	먹글 것 <2.16b>
20	委細	たしかに	조세(仔細) <2.10b>	いさいに	조세히 <2.14b>	いさいに	조세히 <2.19b>
21	明日	あす	내일(來日) <2.14b>	みやうにち	내일<2.21b>	みやうにち	明日<2.22b>
			내일<4.7a>		明日<4.9b>		明日<4.9b>
22	灸	やいと	뜸<2.17b>	きう	뜸<2.26a>		
23	明後日	あさて	모래<3.28b>	みやうこにち	明後日<3.38b>	みやうこにち	明後日<4.1b>
24	公用	くにのこと	나라일<4.4b>	こうよう	나라일<4.6b>	こうよう	나라일<4.6b>

25	帰国	もとり	나가<4.7a>	きこく	가<4.10a>	きこく	가<4.10a>
26	料簡(す)	おもいあわせ	思合き-<4.16b>	りやうけんさ	量見き-<4.23b>	りやうけんさ	量見き-<4.22a>
27		て		つしやれて		つしやれて	
28		そんする	심각<8.7a>	りやうけん	심각<8.10a>		
29		あして	심각き-<8.8a>	御りやうけん なされ	심각き-<8.11b>	御りやうけん なされ	심각き-<8.9a>
29		おもゑわけ	思分き-<9.13b>	りやうけん なされ	思見き-<9.19b>	おほしめしく たされて	심각き-<9.9b>
30	急	いそき	빔비<4.19a>	きうに	빔비<4.27a>		
31	手段	たくみ	요리(妙理) <4.19a>	しゆたん	手端<4.27b>	しゆたん	手段<4.25a>
32	十分	いかう	ㄹ장<5.8b>	すいふん	ㄹ장<5.12a>	すいふん	ㄹ장<5.10b>
33	二日三日	ふつかみか	二日三日 <5.9b>	にさんにち	二三日<5.13b>		
34	所持す	もちまるした	두-<5.24a>	しよちいたし ました	두-<5.35a>		
35	反答	こたい	ㄷ답(对答) <5.26b>	へんとう	ㄷ답<5.38b>		
36	前後	あとさき	前後<5.28b>	せんこ	前後<5.41a>		
37	恐悦	めてたう	아름답-<6.2a>	きやうゑつ	길비<6.3a>		
38	自分	こち	우리<6.3a>	しふん	우리<6.4a>	われわれ	우리<6.3a>
39	大酒	おおさけ	거룩한 술 <6.5b>	たいしゆ	거룩한 술 <6.7b>	たいしゆ	거룩한 술 <6.6b>
40	祝言	いわうて	祝願<6.6b>	しゆうけん	祝言<6.10a>	しゆうけん	祝言<6.8b>
41	辞儀	しんしやく	스양(辞讓) <6.7b>	御しき	스양<6.11a>	御しき	스양<6.9b>
42	今月	このつき	이 달<6.11a>	こんけつ	이 달<6.16a>	こんけつ	今月<6.14a>

43	揚陸す	ふねにおり	밖에 나리시기 <6.21a>	やうりくなさ る	下陸하기 <6.30b>	やうりくなさ る	下陸하기 <6.27a>
44	無礼	むしつけな	무식(無識)하- <7.3b>	ふれいな	無礼하- <7.5a>		
45	城下	くに	고을<7.3b>	しやうか	고을<7.5a>		
46	粗末	させらん	불관(不関)하 <7.5b>	そまつつな	불관하 <7.8a>		
47	用意	しまい	거조(举措) <7.10b>	ようい	거조<7.15b>	ようい	거조<7.8a>
48	使者	御つかい	使<7.15b>	御ししや	使<7.23b>		
49	路中	みちすから	路次<7.16a>	とうちう	路中<7.24a>	とうちう	路中<7.13b>
50	昨日	きのう	어제<7.22b>	さくしつ	어제<7.33a>	さくしつ	昨日<7.20a>
51	最前	みきから	문제<8.8a>	さいせん	在前<8.11b>	さいせん	在前<8.9a>
52	半月	はんつき	반 돌<8.8a>	はんけつ	반 달<8.11b>	はんけつ	반 돌<8.9a>
53	攪応	ふるまい	振舞<8.10a>	御きやうおお	간재<8.14b>	御きやうおお	간재<8.11b>
54	兩人	ふたりしゆ	두 분<8.10b>	御りやうにん	兩人<8.15b>		
55	到着す	まいた	오-<8.14b>	とうちやくい たしまして	오-<8.21a>	とうちやくい たしまして	오-<8.15b>
56	推察	おもうて	너기-<8.16b>	すいさつ	너기-<8.24b>	すいさつ	너기-<8.18b>
57	享	いはち	宴享<8.17a>	御きやう	宴享<8.25a>		
58	楽	はやし	풍류(風流) <8.27a>	かく	풍류<8.40a>		
59	老母	ははちやもの	어미<8.27a>	ろうほ	老母<8.40a>		
60	邪心	御うたかい	의심(疑心) <9.6a>	ちやしん	의심<9.9a>		
61	無類	くらひなき	비(比)할 디 없슨<9.20b>	むるい	비할 디 없슨<9.29a>		

〈表2〉和語が漢語に改訂された例(重刊本段階)

番号	刊本 表題語	原刊本		改修本		重刊本	
		原文	対訳文	原文	対訳文	原文	対訳文
1	残念	かなしおそん しまるして	설이 너겨 <2.5a>	かなしうおも うて	설니 너겨 <2.7a>	さんねんに そんしられて	애들니 너겨 <2.12b>
2	明後日	あさて	모뤼<7.18a>	あさつて	모뤼<7.26b>	みやうこにち	明後日<7.15b>
3	献数	へんかす	진수(蓋数) <3.6b>	へんかす	진수<3.8b>	こんすう	献数<3.8a>
4	少少	すこし	저기<4.16b>	すこし	저기<4.24a>	しやうしやう	저기<4.22b>
5	儀	御こころもち	뜻가짐<4.23a>	御こころもち	뜻가짐<4.32b>	き	일<4.29b>
6	委細	ねんころに	극진(極尽)이 <5.7b>	ねんころに	극진이<5.11a>	いさいに	조세(仔細)히 <5.9b>
7	上船	たたしらる	떠나-<6.12a>	御たちある	떠나-<6.17b>	御しやうせん におよふ	御上船 되- <6.15b>
8	早朝	あかつき	새벽<6.16a>	あかつき	새벽<6.23a>	さうてう	早朝<6.21a>
9	不興	さひしさうな	설설히- <7.11b>	のこりおお 御さり	설설히- <7.17a>	ふけうに	무료(無料)히- <7.9a>
10	到着す	つきまるした	오-<7.17a>	つきまして	오-<7.25a>	とうちゃくつ かまつり	오-<7.15a>
11	昨日	きのう	어제<7.22b>	きのう	어제<7.33b>	さくしつ	昨日<7.20a>
12	祝儀	いわい	祝<10.8a>	いわい	덕담(德談) <10上.15a>	しゅうぎ	덕담 <10上.12b>

〈表1〉、〈表2〉から、原文に見られる漢語化の例をまとめて示せば、次のとおりである。

(1) 固有語(和語)が漢語に改訂された例

a. 改修本段階(計61例)

平座す, 安心す, 今日, 大船, 水夫, 方方, 姓名, 在前, 病氣(2例), 食事, 病身, 着(2例), 作病,

不快, 珍重(2例), 食物, 委細, 明日, 爰, 明後日, 公用, 帰国, 料簡(す)(4例), 急, 手段, 十分, 二日三日, 所持す, 反答, 前後, 恐悦, 自分, 大酒, 祝言, 辞儀, 今月, 揚陸す, 無礼, 城下, 粗末, 用意, 使者, 路中, 昨日, 最前, 半月, 饗応, 兩人, 到着す, 推察, 享, 楽, 老母, 邪心, 無類

b. 重刊本段階(計12例)

残念, 明後日, 献数, 少々, 儀, 委細, 上船, 早朝, 不興, 到着す, 昨日, 祝儀

この結果を通じて、次のようなことが看取できる。まず漢語化の例からは、改修本で61例、重刊本12例あり、改修本での漢語化がより活発であったことが分かる。また改修本で漢語に入れ替えられた例からは、その漢語が重刊本まで維持される傾向があることが確認できる。例えば改修本での漢語化の例、61語の内、削除されずに重刊本まで維持される個数は計41語である。その内改修本の漢語が重刊本まで維持される例は、39語(95.1%)に及んでいる。

また原文の漢語化と対訳文の漢語化には、ある相関関係が存在することが分かる。すなわち、原文が漢語に改訂されると同時に、対訳文でもハングルが漢語に変わっていくのである。〈表1〉と〈表2〉の対訳文の変化を調べてみると以下ようになる。

(2) 対訳文での漢語出現数

a. 改修本段階(計36例)

① 原刊本の漢語を踏襲した例(計15例)：

便ひ, 方方, 姓名, 病, 佯病, 来日, 対答, 前後, 辞議, 不閑, 使, 宴享, 風流, 疑心, 比き-

② 原刊本とは別の漢語に改訂された例(計10例)：

水夫, 病身, 明日, 量見, 思見, 手端, 二三日, 祝言, 無礼き-, 路中

③ ハングルが漢語に改訂された例(計11例)：

安心き-, 今日, 大船, 在前, 病, 食事, 明後日, 下陸きリ, 在前, 兩人, 老母

b. 重刊本段階(計8例)

① 改修本の漢語を踏襲した例(計1例)：徳談

② 改修本とは別の漢語に改訂された例(計2例)：仔細, 献数

③ ハングルが漢語に改訂された例(計5例)：明後日, 御上船, 早朝, 無料き-, 昨日

(1) で示した原文の漢語化の個数と(2)aと(2)bを比較して見ると、まず改修本段階では、原

文での漢語化の例61例の内、対訳文では36例(59.0%)が漢語で現れることが分かる。また重刊本段階では12例の内8例(66.7%)が漢語で現れている。このような分布からは、特に重刊本において、原文の漢語化に引かれた対訳文の漢語使用の傾向が激しいことが分かる。

2.2 固有語化

一方、改訂による固有語化の例には次のような語句がある。

〈表3〉 漢語が和語に改訂された例(改修本段階)

番号	刊本 表題語	原刊本		改修本		重刊本	
		原文	対訳文	原文	対訳文	原文	対訳文
1	大切	たいせつ	거르기<1.6b>	おおくらし う	거르기<1.9a>	おおくらし う	거르기<1.8a>
		たいせつ	大切<2.7a>	御ねんころ	극진어<2.10a>	御ねんころ	극진어<2.15a>
2	先度	せんと	先度<1.8a>	さきころ	先比<1.11a>	さきころ	先比<1.10a>
			전<3.4b>		전<3.6a>		전<3.5b>
3	堪忍	かんにんなる	견디- <1.30b>	つくろわるる	견디- <1.47a>		
4	総別	そうへつ	본딛<2.6b>	もと	본딛<2.9a>		
			본딛<3.5b>		본딛<3.8a>		
5	雑言	さうこん申ま るせうか	雜言<2.14a>	なにと申ませ うか	무어시라 니랴-<2.20b>		
6	問安	もんあん	問安<2.16b>	御みまいも申	보-<2.24b>	御みまいも申	보-<2.24a>
7	本	ほんに	채<3.3b>	さつはりと	채<3.5a>		
8	迷惑す	めいわくしま るする	민망(憫憫)き- <3.9a>	きのとくに御 さりまする	민망하- <3.12a>	きのとくに御 さりまする	민망하- <3.12a>
9	帰島す	きとうする	帰島하- <3.20a>	しまよりまい る	섬으로써 오- <3.26a>	しまよりまい る	섬으로써 오- <3.25a>

10	邪魔	ちやま	희이침<4.21a>	さまたけ	희이침<4.29b>		
11	女坊	ねうふ	거집<4.24b>	おな	게집<4.34b>		
12	心中	しんちう	마음<4.29a>	こころ	마음<4.40b>		
13	苦惱	くのうある	페롬-<5.22b>	むつかしう	페롬-<5.32b>		
14	淵底	ゑんてい	미리<5.24b>	かねて	미리<5.35b>		
15	雑談	ごさうたん	御雑談<6.5a>	御ものかたり	말슴<6.7b>	御ものかたり	말슴<6.6b>
16	船中	せんちう	船中<6.15a>	ふねのものな と	船中人들 <6.22b>	ふねのものな と	船中人들 <6.20b>
17	地界	ちけい	地界<7.2a>	さかい	地界<7.2b>	さかい	地界<7.2a>
18	様子	やうす	스정(事情) <7.12b>	おもむき	쓸<7.18b>		
19	対面	たいめんにて	対面하-	御あいきたさ れまして	보시고<7.33b>		
20	下人	けにんとも	아래 사람 <8.3a>	しもしも	아래 사람 <8.4b>	しもしも	아래 사람 <8.4a>
21	教令	きやうりやう か御され	敎令이 이시- <8.11a>	おおせいたさ れ	니러심 <8.16a>		
22	結句	けつく	도로켜<8.16b>	かゑつて	도로켜<8.24b>	かゑつて	도로혀<8.18b>
23	合点	御かつてんし たいに	맞달하실 대로 <8.25a>	おおせにした かい	니러시느 대로 <8.37a>	おおせにした かい	니러시느 대로 <8.22a>
24	無調法	むてうはう	서어흔 것 <9.5a>	ささうなしな	서어흔 것 <9.7a>		
25	徒然さ	とせんさに	심심하매 <9.6b>	さひしさに	심심하매 <9.9b>	さひしさに	심심하매 <9.5b>
26	肝腎	かんちん	웃듬<9.11a>	もつはら	웃듬<9.16a>		

＜表4＞ 漢語が和語に改訂された例（重刊本段階）

番号	刊本 表題語	原刊本		改修本		重刊本	
		原文	対訳文	原文	対訳文	原文	対訳文
1	正体	しやうたいな くした	인사(人事) 모르-<1.15b>	しやうたいな う	正体 업시 <1.22b>	くたひれて	困き여 <1.20b>
2	過怠	くわたい	過怠<4.2a>	くわたい	過怠<4.2b>	あやまり	허물<4.3b>
3	不足	ふそくなる	不足き- <4.16b>	ふそくなる	不足き- <4.24a>	ひんかおちま しても	날부- <4.22b>

＜表3＞、＜表4＞から、原文に見られる和語化の例をまとめて示せば、次のとおりである。

(3) 漢語が和語に改訂された例

a. 改修本段階（計26例）

大切, 先度, 堪忍, 計別, 雑言, 問安, 本, 慮外, 帰島す, 邪魔, 女坊, 心中, 苦惱, 淵底, 雑談,
船中, 地界, 様子, 対面, 下人, 教令, 結句, 合点, 無調法, 徒然さ, 肝腎

b. 重刊本段階（計3例）

正体, 過怠, 不足

改修本段階において、固有語化の例は計26例であり、漢語化の例(61語)の半分にも及ばない。
また重刊本で漢語が固有語に替えられる例は「正体」、「過怠」、「不足」の3語しかない。要
するに、固有語化の例は漢語化の例に比べ、その出現数が少ないのである。このような相違
は、『捷解新語』改修の方向性が固有語化ではなく、漢語化にあったことを示すものだと考
えられる。

また原文が和語に改訂される例と同時に、対訳文もハングルに替えられる例を示せば、次
のとおりである。

(4) 対訳文でのハングル出現数

a. 改修本段階（計21例）

① 原刊本のハングルの踏襲した例（計13例）：

거르기, 견덕-, 본덕, 채, 희이침, 계집, 막음, 미리, 아래사롬, 도로커, 서어흔
것, 심심하매, 음듬

② 原刊本とは別のハングルに改訂された例(計1例)：니ㄷ시ㄴ 대로

③ 漢語がハングルに改訂された例(計7例)：

무어시라 니ㄷ-, 보-, 섬으로서 오-, 말슴, 섬, 보시고, 니ㄷ심

b. 重刊本段階(計2例)

漢語がハングルに改訂された例：히물, 날부-

(4)aは改修本段階において、ハングルで現れる例を示したものである。改修本段階では、原文の和語化の個数26例の内21例(80.8%)がハングルで、また重刊本段階では、3例の内2例がハングルで現れている。このような分布を通じて、原文の和語化は、対訳文のハングル化に影響を与えていることが分かる。

以上、『捷解新語』語種変化の様相を調べてきたが、語種改訂は原文と対訳文の両方に、次の傾向を指摘することができる。まず漢語化の場合、改訂を重ねるほど漢語が増加していることが分かる。この時、一旦漢語に改訂された単語は、重刊本まで維持される傾向が強い。また固有語化の場合、漢語化の例に比べ、その出現数が少ない。が、原文の固有語化の例に該当する対訳文はハングルで現れている場合がほとんどであった。このように、対訳文の語種は、原文の語種に干渉を受けていることが看取できる。

3. 語彙改訂の方向性

本章では、2章での語種改訂の分析結果を基に、『捷解新語』語彙改訂の方向性について述べる。そのために、まず語種改訂以外に行われた『捷解新語』の改訂内容を確認する必要があるだろう。また他の改訂と比べ、語種改訂が占める比率を調べる。

〈表5〉『捷解新語』原文での語彙改訂の類型⁽⁶⁾

類型 段階	漢語化	和語化	接辞交替 ⁽⁷⁾	単語削除	総計
原刊本→改修本 (比率)	61 (17.2)	26 (7.3)	94 (26.6)	173 (48.9)	354
改修本→重刊本 (比率)	12 (11.4)	3 (2.9)	15 (14.3)	75 (71.4)	105

〈表5〉は、原文の変更を類型別に分け、その分布の変化を示したものである。この結果を通じて、全体の変化類型の中、語種変化が占めている分布は、改修本段階においては、合計354

例の内87例(24.5%)で、重刊本段階においては、合計105例の内15例(14.3%)である。このような分布から、『捷解新語』の改訂において、語種の変更に改訂内容の重要な一部分を占めていたことが推測できるだろう。

漢語化の例は、改修本と重刊本の順に、各々61語(17.2%)と12語(11.4%)であるが、和語化の例は、各々26語(7.3%)と3語(2.9%)に過ぎない。この分布の変化からも、ある程度『捷解新語』の語種改訂の意図を推察することができるが、より正確な結果を得るためには、各刊本全体を検討する必要がある。

そのため、ここでは金基民(1995:109)の調査表から、原文の語種別の異り語数⁽⁸⁾部分を引用し、その比率を加えて<表6>に示す。

<表6> 『捷解新語』原文の語種別の異り語数

語種 刊本	漢語	和語	混種語 ⁽⁹⁾	計
原刊本	420	1,062	23	1,505
(比率)	(27.9)	(70.6)	(1.5)	
改修本	474	1,169	20	1,663
(比率)	(28.5)	(70.3)	(1.2)	
重刊本	426	968	14	1,408
(比率)	(30.3)	(68.8)	(0.9)	

<表6>からは、改訂の方向性を読み取ることができる。全体としても、改訂を通じて漢語が増加してゆき、和語が少しずつ減少する傾向がある。

また対訳文での漢語と固有語の用例数を数えた結果を示しておく。

<表7> 『捷解新語』対訳文の語種別の異り語数⁽¹⁰⁾

語種 刊本	漢語	ハングル	計
原刊本	514	1,419	1,933
(比率)	(26.6)	(73.4)	
改修本	566	1,438	2,004
(比率)	(28.2)	(71.8)	
重刊本	534	1,064	1,598
(比率)	(33.4)	(66.6)	

〈表6〉と〈表7〉を比較してみると、語種に関してはその各刊本内における比率も大差なく、ほぼ同じような分布になっていることが分かる。このような語種分布の類似性が見られることは、対訳文の語種が原文の語種から、影響を受けていたことを示唆するだろう。

前章では、原文の語種改訂と対訳文のそれとは、相関関係が存在することを確認したが、〈表6〉と〈表7〉からもそれと同趣の相関関係を見ることができる。つまり、〈表6〉の原文での漢語使用が増加していくことにつれて、対訳文の漢語も増えていくこと、逆に言えば、原文の和語が減少するのに応じて、対訳文のハングルも少なくなってくる。このような現象からは、『捷解新語』の原文と対訳文に共通する改訂意識が存在した可能性が窺える。

4. 語種改訂の目的

『捷解新語』の語種改訂には、改修本では固有語が漢語に入れ替わる例が多いこと、また、一旦固有語から漢語に変わった単語については、重刊本までそれが維持されている傾向があることを指摘したが、ここで問題となるのは、司訳院の朝鮮通訳官は、このような改訂をどういう目的で行ったかという点である。『捷解新語』の改訂に日本人が関与したという事実は、改修本と重刊本の序の記述から確認できる。

乃登塗使諸譯 與彼人之護行者 互相質難遂段更改（『捷解新語』改修本、序3a）

在行中寔主其事 與倭人之護行者 互相質難遂段釐改（『捷解新語』重刊本、序1b-2a）

したがって、この問題の解決には中世と近世日本国内文献での漢語に対する認識を調べる必要があるだろう。近世日本国内資料において、和語と漢語に対しては、意識の違いが見られる。

『かたこと』では、

一きのふおとゝひといふべきを、さくじつ、一さくじつといひ。あす、あさてを、みやうにち、みやうごにちぞなどいふやうのことは、児喝食若き女房には似つかはしからずや、よろづ是に准へて知べしと云り。されど時にしたかひ、品によりて、いはずして叶はぬことも侍るべし。（『かたこと』巻一、21a-21b）¹¹¹⁾

としている。このように、漢語を使うことは、児童・若者・女房には相応しくないことであると指摘し、ただし、場合によって漢語を使わなければならない時があることを述べている。これは固有語と漢語の使用を位相の問題と関連づけて把握しているのだろう。

漢語の使用を位相の問題と把握した記述は、中世キリシタン資料の記述にも見られる。ロドリゲスは『日本大文典』⁽¹²⁾(5頁)では、日本語の語彙の構成について、次のように述べている。

一般の日本語は、すべてのことに、支那および日本を意味する‘和、漢’(Va,Can)、又は‘漢、和’(Can,va)の二語によって示される二通りの語がある。その一つは‘こゑ’(Coye)と呼ばれて、支那語を意味する。他は‘よみ’(Yomi)と呼ばれて、固有の日本語を意味する。かくして、日本語は、‘こゑ’の混じらない本来の純粋な‘よみ’であるか、(1) ‘よみ’に少しく‘こゑ’の混じたもので、すべての人に通用するものであるか、(2) ‘こゑ’の多量に混じたもので、やや荘重であり、日本人が普通には文書に用ゐ、重々しい身分の者とか学者とかが談話に用ゐるところのものであるか、(3) 純粋の‘こゑ’のみのもので、最も晦渋であり、坊主が仏典の上で使ふところのものであるか、そのいずれかである。(引用者注：下線・番号は筆者が付したもの)

ロドリゲスは、ヨミ(和語)とコエ(漢語)を区分し、場面と話し手の身分によって漢語使用量が異なることを指摘している。まず(1)のように、和語が多いものは普通の話である。また(2)のように、漢語が多いものは文書のなかで用いられるか、身分が高い人や学者の談話に用いられると把握している。そして(3)では、純粋な漢語のみのものは、仏典のように宗教的な特殊な場合に使われることを述べている。

『かたこと』と『日本大文典』の記述は『捷解新語』改訂の目的を知るために、重要な手がかりになる。すなわち『捷解新語』の語種改訂の方向性は、ロドリゲスが言う(1)の文章から(2)の文章への改訂であっただろう。これは「重々しい身分の者とか学者とかが談話に用ゐるところのもの」への改訂であったと考えられる。

この事実は『捷解新語』の編纂目的からも裏付けられるだろう。すなわち、『捷解新語』は、倭学訳官を対象にした教科書であり、外交実用書としての役割も果たした。そこで、改訂時には、外交実務に相応しくない言葉を置き替える必要があっただろう。このような目的に相応しい表現は、当時においては漢語の多用によって実現できたのである。

本稿で考えてきた『捷解新語』の語種改訂は、朝鮮通訳官による、厳かな表現に変えると

いう目的意識の下で行われた意図的な改訂であったと考えられる。その結果、『捷解新語』の文章は、ロドリゲスが言う「莊重」な雰囲気の記事に替えられることになったのだろう。

<注>

- (1) 亀井孝(1958)、安田章(1965)、安田章(1966)、浜田敦(1981)、大友信一(1981)、李明姫(1987)、安田章(1991)等参照。なお『捷解新語』の語彙、および他の部門についての研究史は、辻星児(1997)参照。
- (2) 安田章(1970)、森田武(1973)等参照。
- (3) 古田和子(1987)、韓先熙(1991)、新裕美(1991)、金基民(1995)、池景来(2000)等参照。
- (4) 日本語単語はその起源によって和語・漢語・外来語等の「語種」に分けられるが、ここでは朝鮮語の語種も一緒に検討するため、漢語と固有語(和語、ハングル)に大きく分ける。また本稿で使う「ハングル」は、朝鮮固有語の意味で用いる。
- (5) 山田孝雄(1994:41)では、「主として漢音・吳音を以てよばるゝ語をさすものといふべく、又唐音・宋音などを以てよばるゝ語を含めていふべきものあることをこゝに認めたり」とし、音韻的な観点から「漢語」を規定している。本稿で使う「漢語」もこのような音韻的な規定に従った用語である。
- (6) 『捷解新語』は改訂に際して、その内容の内、公務に相応しくない場面は、その場面全体が削除される場合が多い。筆者の調査に依れば、場面削除による単語削除の個数は、改修本段階で100例、重刊本段階で305例が見られる。こういう場面削除による単語削除は調査対象から除いた。
- (7) 敬語的接辞「御」や、複数の接辞「衆」等の改訂がここに該当する。
- (8) 『捷解新語』は改訂時において、単語の総数の出入りがある。改訂の方向性を知るためには、異り語数の分布を調べ、また全体例からの比率を比較することが有効だろう。
- (9) 『国語学大辞典』(1980:743)では「語種を異にする語の複合したもの」と定義している。また対訳文では混種語と認められるものが見つからなかったため、<表7>ではこの欄を別に表示しない。
- (10) この結果は筆者が入力した『捷解新語』コーパス資料を用いた。一の目安として出した結果である。
- (11) 翻字は『かたこと』(『国語学大系』第十九巻)に拠る。また下線は引用者による。
- (12) 日本語訳は『日本大文典』(土井忠生訳註、1955)に拠った。

参考文献

- 京都大学文学部国語学国文学研究室編(1972)『三本対照捷解新語本文編』京都大学国文学会
京都大学文学部国語学国文学研究室編(1973)『三本対照捷解新語釈文・索引・解題編』京都
大学国文学会
京都大学文学部国語学国文学研究室編(1987)『改修捷解新語本文・国語索引・解題』京都大
学国文学会
- 大友信一(1981)「中国・朝鮮資料の語彙」『講座日本語の語彙 4 中世の語彙』東京：明治書
院
- 亀井孝(1958)『捷解新語』小考』『一橋論叢』(一橋大学一橋学会) 39-11
- 韓先熙(1991)『捷解新語』の漢語——原刊本と改修本の対照を通して』『明治大学大学院紀
要』(明治大学文学部国語学研究室) 28
- 国語学会編(1980)『国語学大辞典』東京：東京堂出版
- 金基民(1995)「語彙の交替と変遷をめぐって——『捷解新語』を例として」『文学研究科紀
要 別冊』(文学・芸術学編、早稲田大学大学院文学研究科) 21
- 白木進篇(1976)『かたこと』東京：笠間書院
- 新裕美(1991)『捷解新語』に於ける漢語——改修態度を中心として』『辞書・外国資料によ
る日本語研究』(大友博士還暦記念論文集刊行会編) 東京：和泉書院
- 池景来(2000)『捷解新語』語彙の計量的考察』全州大学博士学位論文(韓国)
- 辻星児(1997)『朝鮮語史における『捷解新語』』岡山大学文学部研究叢書 16
- 土井忠生訳註(1955)『日本大文典』東京：三省堂、原著 Rodriguez (1604~8)
- 浜田敦(1981)「えい・よい・よろしい」『国語国文』(京都大学国語学国文学研究室) 50-1
- 福井久蔵撰輯(1938)『国語学大系』第十九卷(方言一) 東京：厚生閣
- 古田和子(1987)『捷解新語』原刊本における漢語の研究—日本語本文と韓国語対訳文との
対照を通して』『駒沢国文』(駒沢大学文学部国語学研究室) 24
- 森田武(1973)「捷解新語解題」『三本対照捷解新語釈文・索引・解題編』(京都大学国文学会)
- 安田章(1965)「朝鮮資料覚書——『捷解新語』の改訂」『論究日本文学』(立命館大学日本文
学会) 24
- _____ (1966)「対訳」『国語国文』(京都大学国文学会) 35-6
- _____ (1970)『伊呂波』雑考』『国語国文』(京都大学国文学会) 39-3
- _____ (1980)『朝鮮資料と中世国語』東京：笠間書院

_____ (1991) 「捷解新語の冒頭表現」『表現研究』(表現学会) 54

安田章・鄭光(1991)『改修捷解新語』(解題・索引・本文) ソウル: 太学社

山口明穂他(2001)『日本文法大辞典』東京: 明治書院

山田孝雄(1994)『国語の中における漢語の研究』東京: 宝文館出版(初版1940)

李明姫(1987)「原刊『捷解新語』から『重刊改修捷解新語』への改変」『国語学研究』(東北大学文学部国語学研究室) 27

<付記>

本稿の執筆にあたり、指導教官である木田章義先生から多大な指導と助言をいただいた。厚く感謝の意を申し上げたい。言うまでもなく、本稿の不備に関する責任はすべて筆者にある。

本稿は平成15年科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

(パク チナン・博士後期課程)